

地域の中での癒しの場づくり ある茶店の取り組み

著者	坂口 美和, 川出 富貴子, かねしげ けんじ
雑誌名	三重看護学誌
巻	16
号	1
ページ	73-79
発行年	2014-03-15
その他のタイトル	One restaurant striving to be a healing place in the community
URL	http://hdl.handle.net/10076/13837

地域の中での癒しの場づくり

— ある茶店の取り組み —

坂口 美和¹, 川出富貴子², かねしげけんじ³

One restaurant striving to be a healing place in the community

Miwa SAKAGUCHI, Fukiko KAWADE and Kenji KANESHIGE

Key Words: community, healing place, Japanese restaurant, omotenashi

1. はじめに

平成 22 年国民生活基礎調査（厚生労働省 2011）によると、12 歳以上の人の 46.5% は日常生活での悩みやストレスを感じており、42.6% の人は悩みやストレスがないと回答している。この調査は入院中の人を除いているので、彼らを含めれば、老若男女より多くの人が悩みやストレスを抱えて生活をしていることが窺える。

現代日本社会は、昨今の異常気象、PM 2.5 の大気汚染、東日本大震災後の放射能汚染など、自然環境の変化から健康に対する悩みや不安をもちやすい。日本経済の成り行きの中で、非正規雇用、失業、経済的困窮、多重債務、過重労働など労働者と家族の人生、生活を脅かす出来事も起こっている。平成 24 年労働者健康状況調査（厚生労働省 2013）では、働く人の 60.9% は仕事に関して強い不安や悩み、ストレスがあることが示された。中でも 41.3% の人が職場の人間関係を原因に挙げている。いじめも社会問題になっており、当事者の自死は家族はもとより、教育現場、子ども達、報道を見聞きする人たちに強い衝撃を与える。平成 24 年度は自殺者が 2 万 7,858 人と平成 10 年以降初めて 3 万人を下回っているが、未だ多くの人が自死をしている現状である（内閣府 2013）。さらに、人工妊娠中絶件数をみると年々減少しているのだが、平成 21 年度で 22 万 3,405 件行われている（厚生労働省 2011）。

中絶は心身ともに様々な影響を及ぼすことを考えれば、日常生活の中で悩みを抱える人もいるだろう。

このように現代人は、自然環境や様々な年代が抱える発達課題に応じて、悩みやストレスを抱えやすい状況にある。まして、人間関係の希薄化が問題視されていることもあり、悩みやストレスを独りで抱えてしまうことも考えられる。また、病気をもって外来治療を継続している人や症状マネジメントに関わる家族は、発達課題に応じた悩みやストレス以外にも、病気をもつことからくる多様な悩みやストレスを抱えて生活をしている。調査時にストレスがないと回答した人々も、より健康的で幸せと感じる日常生活を継続することは課題となってくる。

健康保持、疾病予防は言われてきていることだが、これからはますます、入院治療、外来通院をしている人だけでなく、病院に行くほどでない心身の不調をもつ人たち、健康の保持を継続していく人たちの身近なところで、様々な悩みやストレスから自分を取り戻したり、リラックスできる癒しの場を考えていく必要がある。

病院建築計画学が専門の長澤（1997）は未来の癒しの環境は、現在の病気の館「病院」を脱して、予防の観点から健康な館「健院」にすることを提唱している。健院は、非収容型で日常的な環境の中で、病気をもついても個人が健康保持をするという意識をもって自分の健康管理を行うことが求められる。学校やスポー

1 三重大学医学部看護学科

2 広島文化学園大学看護学研究科

3 ほっこり処いわくら

ツジムも健院の一部になる可能性がある。

健院の建設を日本社会でどのように具現化していくのかは、これからの課題であると思われるが、地域の中で個々人のニーズに応じた多様な癒しの場を作っていくことは必要であろう。例えば、悩みやストレスの内容に特化した癒しの場としては、幼稚園や保育園に行っていない子どもをもつ保護者と子どもを対象にした子育て支援を年中提供する保育園などがあげられる。在園児と家族だけでなく、待機児童をもつ家族、子育て不安をもつ家族など、子育て時期だからこそ抱える悩みやストレスに対応する場所である。また一方で、悩みの内容やストレス状態に限定されず、気軽に出かけていき、落ち着ける場所、自分を取り戻す場所も必要であろう。

本稿では、地域の人々の癒しの場になろうと作られた茶店の癒しの場づくりを紹介し、そこから見えてくる地域の中での癒しの場づくりについて考察する。

II. 癒しの場づくり紹介

1. 茶店の誕生

この茶店は、2012年2月に開店した明石焼きをメインに提供するところである。地域の癒しの場になる店を作ろうと店主と賛同する仲間たちが作り上げてきた。店主にとって仲間たちは恩人と思える人たちだ。

店主が地域の癒しの場を作りたいと思っていた2011年11月、たまたま店主と仲間たちが東京で明石焼きを頂き、「何ともいえないふわとろーりの食感」に魅せられた。12月には本場の明石焼きに出会う旅に皆で出かけ、店のメインは明石焼きにすることが決まる。

様々なメニューや店名の書字は、ふとした出会いから店からほど近いところに居られる書道家が書いてくれることになった。この方は店の主旨を十分理解するだけでなく、店主や仲間たちの人となりに敬意を表して書字を手掛けてくれた。

店のディスプレイは、店主がこれまでの繋がりから人柄をよく知っている人をお願いをした。

店名も、店主や仲間があれこれ考え、仲間がふと思いついた言葉と、神の御在所の意をもつ言葉を合わせて命名した。

この店は、店主と仲間たちの地域に癒しの場を作ろうという思いが、「たまたま」や「ふと」の出会いの連続で、わずか数か月後に実現したところである。(写真1)



写真1 茶店の入り口

2. 店のディスプレイ

店舗面積約15坪、カウンター席8席、掘りごたつ席13席のこじんまりとした店のディスプレイは、ツバキをモチーフにし、のれんや小物にさりげなく用いて和の雰囲気を演出している。店のちょっとした空きスペースには、月毎にその季節を感じさせるディスプレイがなされている。例えば、残暑厳しい9月でも、ディスプレイは柿やすすき、夕焼けどきに遊ぶ子どもや犬の影が描かれた布といった秋を連想させるもので彩られている。

このディスプレイは、昨今の温暖化現象等で昔の季節と比べて少し先取りをしているように思える。忙しい日常では気づかないけれども少しずつ時は進んでいることを何気に教えている。また、ディスプレイに関連した思い出を思い出すこともあるだろう。店を訪れる人々は、今を生きる人であるが、少し先のこと、少し前のことと現在過去未来の時間を行き来することができる。(写真2, 3, 4, 5, 6)



写真2 和の雰囲気の店内



写真3 ツバキがモチーフ



写真4 小物の柄はツバキ



写真5 季節を感じさせるディスプレイ



写真6 空きスペースも季節を醸し出す

3. 水の音

店のカウンターには陶器の水琴窟が置かれている。意識をすれば心地よい水の流れる音が聞こえているが、気にしなければ、店の空間に溶け込んでいる。自然界には耳には聞こえない高周波音が含まれており、脳の活性に影響を及ぼすことが言われている。Oohashi, Nishina, Honda ら（2000）によると、脳血流の増大、 α 波の増加、免疫活性の上昇、ストレス性ホルモンの低下など高周波音による hypersonic effect は、主観的にも非常に良い気持ちになるという。店の中で水琴窟の水の流れる音は、自然界の川の流れる音に似ている。知らず知らずのうちに店に訪れる人をリラックスさせているのかもしれない。

4. いわくらの書字

店に入ってすぐ右手にある空間には、この場所は神の御在所であるという気持ちを表わす言葉いわくらの由来が書かれた書字が目に入る。

いわくらの語源には神の宿る依り代（よりしろ）
神の座るところという意味があります
いわくら「岩座」「磐座」
神社の原型であり、古事記や日本書紀にも出て来

る語です

「いわくら」にはみなさまを心からお迎えしほっこりくつろいでいただける場所と言う願いを込めました

店主敬白

この店は、神がおられる場であり「自分の我で何かをする」のではなく、「感謝してさせていただく」という気持ちの表明でもある。そして、この店がどういう場でありたいのか、ありたい姿、希望を店主の願いとして表わしている。

今後、この店は、訪れる人のニーズによって様々に変化していくことだろう。しかし、この店のあり方はこれからも変わらないものとしてあり続ける。（写真7）

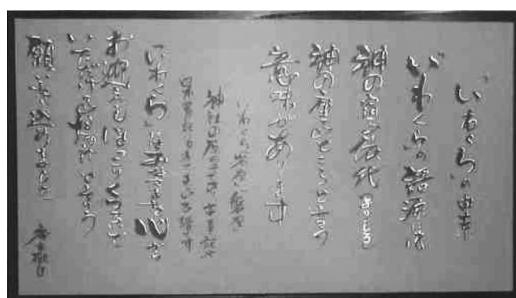


写真7 いわくらの書字

5. 神棚を祭る

店には、神のおられる場であることを象徴するかのよう
に神棚が祭られている。天照皇大神や氏神、金勝
要神などのお神札が並んでいる。店を訪れた人は、カ
ウンターにいる店主を見ると、自然に神棚が目に入る。
そのためか店主だけでなく、訪れる人の中には神棚に
おまいりをする人もいる。(写真8)



写真8 水の音、神棚

6. お品書きの表紙「えんあって」

お品書きの表紙には、「○あって」と書かれている。
○を「えん」と呼び、「縁」の意を込めている。訪れ
る人たちは、偶然訪れたように見えても、何かの縁が
あって店に来られている。その縁を大事にしたいとい
う思いからお品書きにも「ようこそ」の思いを込める。
開店して1年経つ頃には、店を訪れる人の8割はリピー
ターになっていた。その方たちは、手土産をもって来
てくれる。地方に出かけたときに買い求めたもの、自
作の野菜などである。こうしたお土産は、メインの料
理の合間に出され、訪れる人たちのちょっとしたサブ
ライズにもなっている。(写真9)



写真9 お品書き えん(縁)あって

7. 地場の浄化

ここは、地域の癒しの場を作ろうと開いた店である。
そのため、この店が気持ちの良い場である必要がある。

店内のディスプレイなど目に見えるところだけではなく、
地場を浄化し活性させるためのものを置いている。
開店して1年経過しているが、この店の近隣には新し
く店が出来てきており、少しずつ地域も活性化されて
きている。

8. 料理

この店のメインメニューは明石焼きである。外はふ
わふわ、中はとろり、出来立てのあつあつを提供して
いる。訪れた人がほっこりする料理だ。他にも地元の
旬の野菜を使ったおぼんざいや関門タコ飯もある。コー
ヒーや煎茶などの飲み物、甘味、ランチコース、夕食
コースなど、少しずつメニューが増えている。

この店では、開店してからこれまで残飯が出ていな
い。ここで提供される料理は質量共に満足のいくもの
なのだろう。(写真10, 11)



写真10 明石焼きとタコ飯



写真11 お品書き

9. おもてなし

この店はおもてなしに力を入れている。料理を心を
込めて作ることだけでなく、訪れる人の視線になるこ
とを心がけている。例えば、短いスパンで訪れる人
には、明石焼きとタコ飯以外のメニューを変えている。
幼児が居る場合には、同伴の大人にどういう味付けが
よいのかを聞き、幼児が食べられる味に変える。また、

予約があるときには食べられない食材を聞き、その食材を使わない献立にするなど個々の対応をしている。

訪れる人たち1組当たりの滞在時間は最長3時間にも及ぶ。カウンター席に座り、ゆっくりくつろぎながら、店主にあれこれ身の上話をする人もいる。店主は、そうした話をじっくり受け止めて聴いている。例えば、ある年配の男性は、随分前に食べた明石焼きの味が忘れられなくて来店したと話し出した。そして、抗がん剤の治療を前にして食べてみたかった胸の内を語られ、店を出るときには再訪を告げた。この方は、その後健康を回復されてご家族と一緒に時々に来られている。

この店では、訪れた人が自分で大事なことに気づいたり、元気になって動き出したりと変わっていく例が続いている。

III. 考 察

現代日本社会は、自然環境が悪化し、人間関係が希薄な中、各年代の発達課題に応じて、様々な悩みやストレスを抱えやすい状況にある。悩みやストレスが続いていれば、健康状態、個人の元来もっている力（強み）の発揮状況にも影響が及ぶだろう。

こうしたストレス社会を鑑み、この茶店は、飲食だけに重点の置かれた店ではなく、「地域の癒しの場を作る」ことを意図した店であった。

これからの地域の中での癒しの場づくりについて、この茶店の中心に据えられているおもてなしに着目し考察する。

1. おもてなしの心

この茶店の特徴といえば、訪れる人がゆったりくつろげるために、おもてなしに力を入れていることである。この茶店のおもてなしとは、訪れる人の視線になることを心がけるということである。料理を心を込めて作ることも、ディスプレイや水琴窟等、居心地の良い場を作ることとも店主の心の表れである。つまり、店主の心は、常に訪れる人に向いているということである。

では、店に神棚を祭り、いわくらの書字を掲げているのは何故だろうか。この茶店は「たまたま」「ふと」といった自然の出会いに導かれて、思い立ってから僅か3か月弱という早さで開店したのだった。何から何までとんとん拍子に決まっていくことに、人知の計り知れない働きを感じずにはおれないだろう。地域に癒しの場を作るという店主の意志は、神様も賛同し応援しているからこそ開店に結び付いたと思えるのだ。つまり、この店は、店主と賛同する仲間たちで作ったというよりは、店主と賛同する仲間たちと神様の、見え

る世界と見えない世界の合作なのだ。

見えない世界と表現すると科学とは関係のない宗教上の話に思われがちであるが、量子力学の世界では、意識が現実を創造しているなど、常識では理解しがたい現象が示されてきている。こうした量子力学が示す現象を理解するのに、例えば国際的な量子物理学者Bohm（1980）はひとつの宇宙論を示した。宇宙は、内蔵秩序（implicate order）からなる一つの集合が存在し、ある必然力（force of necessity）が内蔵秩序の要素同士を結び付け、顕前秩序（explicate order）において披き出し顕現するというものだ。内蔵秩序は、時間、空間、物質、生命、意識、などすべてが包み込まれており、分断不可能な全体性として存在する。内蔵秩序は、包み込み、披き出しの止むことのない流れの状態にあり、内蔵秩序と顕前秩序の関係はホログラムに相似している。一個人の中に宇宙の全てが含有されている。

つまり、宇宙は見えない世界と見える世界の2重構造になっており、見える世界は見えない世界から披き出てくるものであるという。

こうした量子物理学の考え方をを用いると、「地域に癒しの場を作りたい」という店主の意志がまずあり、見えない世界と見える世界が融合し、茶店という形になって実在するものとなったと解釈できる。世界の二重構造の存在を認識することは、知識を得ること以上に心のありように影響を及ぼすだろう。

例えば、物事が見えること、目先のことで判断することの狭さを教えてくれる。店の収益を例に挙げると、目先のことを考えれば、訪れる人の滞在時間が短く、席の回転がよいことが目指される。しかし、それではこの茶店の存在意義が希薄になってしまう。部分には全体が映し出されているのであれば、茶店を通して地域の人々のよりよい癒しの場になるためにはどうしたらよいのか、と日々の1つ1つのおもてなしを大事にし、真摯に学び続け、経験を積み重ねることの結果が、茶店の存続という全体を映し出し、そこには収益が含まれるという考え方もできるだろう。

また、店主の意志（意識）が実在する茶店の始まりだったことを知ることで、店主の意識がいかに重要であるのかを認識させられる。意識が変われば実在も変わっていく。地域の癒しの場であり続けるためにも、そう願った初心を持ち続けることが重要であることが分かる。

そして、人知の計り知れないところへの畏敬の念は、人をいつも謙虚にさせる。店主は、見えない世界に支えられていることを認識し、訪れる人をただの客ではなく、縁あって訪れた人として迎える。この茶店のお

もてなしは、見えない世界と見える世界を店主の心で繋ぎ、統合されたものとして存在しているのではないかと考える。

2. おもてなしから生まれるもの

ある年配の男性は、随分前に食べた明石焼きの味が忘れられなくて来店したと話し出した。そして、抗がん剤の治療を前にして食べてみたかった胸の内を語られ、店を出るときには再訪を告げた。この方は、その後健康を回復されてご家族と一緒に時々に来られている。

これは、先のおもてなしで紹介した事例である。この茶店に初めて訪れたこの男性に何が起こったのだろうか。普通は食事に来て、初めて会う店主に心に思っているおそらく一番気になっているだろうことは言わない。自分の弱みを見せるようなものだからである。まして年配の男性となれば、なおさらであろう。話をすることを強制されたわけでもない、自主的に話をして、再び訪れることまで付け加える。「旅の恥は掻き捨て」という類のものではないことがわかる。

訪れる人たちは、会社員であったり、学生であったり、母親であったりと自分の帰属集団をもっている。その中で愛情に満ちた関係を切望するのは、心理学者 Maslow (1954) が言う基本的欲求の一つである。しかし、その帰属集団の中で、人間関係に悩んだり、大勢の中に埋没して自分らしさが失われたりと、自尊心が揺らぎ、自分の弱さを隠すために繕わなければならないこともあるだろう。

店主は、訪れる人が気持ちよく店に居られるように心配りをする。縁あって店を訪れた一人ひとりを大切に作る態度、自分の我で訪れる人にしてあげるのではなく、させていただくといった謙虚な態度は、訪れる人に受け入れられている安心感を与えるだろう。

哲学者 Buber (1932) は「世界は人間のとる二通りの態度によって二通りになる」と言った。つまり、相手は相手だけで存在するのではなく、常に私との関係の中で存在する。「我—それ」の態度は、例えば、店主が訪れる人を利益の対象とだけ見る態度だろう。そこには店主と訪れる人との関わりがない。訪れる人はこちらの操作可能な対象「それ」になる。この茶店の店主の態度は、「我—汝」の態度である。店を訪れた人は店主と縁があって店を訪れた人であり、掛け替えのない汝として立ち現れる。そして対話を通じて店主は汝と出会うのである。

こうした態度でおもてなしを受けたとき、明石焼きを頂いた男性が自分の身の上話を始めるのも不思議ではないだろう。店にたたずみ、明石焼きを頂く中で、何重にも着ている自尊心を守る鎧を脱いでも大丈夫と

安心したのではないだろうか。そして、自分の仕方で自分自身を見つめたり、大事なことに気づいたり、何か心が動くものがあつたのではないだろうか。帰るときの笑顔がそれを物語っているように思われる。

3. これからの地域の中での癒しの場づくり

この茶店を訪れる人の8割は再び店を訪れている。手土産をもって訪れる人は、食事をする目的だけではなく、店主に会いに来ているのだ。再訪する人は、新しい人を連れてくる。こうして少しずつ地域の中に溶け込み、地域の人々にとってのこの茶店の存在意義が明らかになっていくと考える。「地域の癒しの場を作りたい」という店主の意志は、訪れる個々人にとっての癒しの場として体现していくのであろう。

地域の中での癒しの場づくりは、例えば、病院から出たところに作られているイギリスの「マギーズ・キャンサー・ケアリング・センター」がある。ここは、医療専門スタッフがおり、がんになっても自分の力を取り戻していくための場所として存在している。がんをもった当事者だけでなく、家族、友人、介護者、病院スタッフ等、がんに関わる全ての人が対象となり、いつでも利用することが出来る (Lee, 2010)。また、東京の「暮らしの保健室」も地域の空き店舗に医療を含めた相談支援の場を作っている。ここは、各人が自分の力を取り戻すために、がんに限らず、誰が訪れても歓迎されるところだ。医療専門家だけでなく、ボランティアの力も借りて、訪れる人がゆっくり話ができるようにしている (秋山, 2012)。こうした医療が関わる必要のある癒しの場もこれから各地で求められるだろう。

また一方で、この茶店のような、飲食等、それだけを考えれば癒しとはかけ離れた場所において、訪れる人が自分を取り戻していける場所も求められるのではないだろうか。人々のもっている力を引き出す場所は、その人のそのときの状況状態で様々にあってよいと考える。これからの時代は、医療の専門家だけではなく、地域の人々が自分を取り戻していけるような癒しに貢献できるのではないだろうか。そのとき、大事にされるものは、この茶店のおもてなしの心ではないかと考える。

IV. おわりに

地域の人々の癒しの場になろうと作られた茶店の癒しの場づくりを紹介した。この茶店のおもてなしは、見えない世界と見える世界を店主の心で繋ぎ、統合されたものとして存在しているのではないかと考えられ

た。また、このおもてなしから生まれるものは、安心感であると推察した。そして、その時のその人の状況状態で様々な形で地域に癒しの場があってもよいことを考えれば、これからの地域の中での癒しの場づくりには、医療専門家だけではなく、地域の人々も貢献できることを述べた。人が自分を取り戻していけるような癒しの場に必要なのは、この茶店のようなおもてなしではないかと考えた。

引用文献

- 秋山正子（2012）：自分力を引き出す「暮らしの保健室」～団地の空き店舗を利用した相談窓口開設の実践から～、30年後の医療を考える会編、メディカルタウンの自分力、19-39、30年後の医療の姿を考える会、東京。
- Buber（1932）／植田重雄訳（1979）：我と汝・対話、7-47、岩波文庫、東京。
- Bohm（1980）／井上忠、伊藤笏康、佐野正博：全体性と内臓秩序、294 - 329、青土社、東京。
- 厚生労働省（2011）：平成22年国民生活基礎調査の概況、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/3-3.html>, 2013/09/30。
- 厚生労働省（2011）：平成22年度我が国の保健統計、年齢階級別にみた人工妊娠中絶件数の年次推移
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/hoken/national/22.html>, 2013/09/30。
- 厚生労働省（2013）：平成24年労働者健康状況調査
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/h24-46-50.html>, 2013/09/30。
- Laura Lee（2010）：マギーズ・キャンサー・ケアリング・センターの実際～設立の背景と実際～、30年後の医療の姿を考える会編、メディカルタウンの再生力、81-92、30年後の医療の姿を考える会、東京。
- Maslow（1954）／小口忠彦監訳（1971）：人間性の心理学（第10版）、89-101、産業能率短期大学出版部、東京。
- 内閣府（2013）：平成25年版自殺対策白書概要版（PDF形式）
<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2013/pdf/gaiyou/>, 2013/09/30。
- 長澤泰（1997）：癒しの環境ハードとソフト、日経メディカル開発編、安らぎの医療環境を求めて、63-70、日経メディカル開発、東京。
- Oohashi T, Nishina E, Honda M et al（2000）: Inaudible high-frequency sounds affect brain activity: hypersonic effect, J Neurophysiol, Jun; 83(6), 3548-58。

キーワード：地域、癒しの場、茶店、おもてなし